

## 研究発表もうしこみフォーム

氏名: 楊 海英

氏名のローマ字表記: Yang Haiying

所属: 静岡大学人文社会科学部アジア研究センター

専門分野: 歴史人類学

発表のタイトル: テュルク・モンゴル社会における「氏族」制度の変遷に関する再検討  
発表要旨(600字～800字程度):

ロシア(ソ連)のモンゴル学者ウラヂーミルツォフが大著『蒙古社会制度史』等を通して、モンゴルの「氏族」(obugh=omogh, Turk: oba, uru, urugh)制度は13世紀に「崩壊」したとの仮説を提示してから、歴史学・人類学者たちはほぼ無批判的にそれを応用してきた。ウラヂーミルツォフの見解はモンゴルのみならず、テュルク系諸民族の父系親族集団の分析にも適用された。ウラヂーミルツォフが用いた「氏族」の概念はエンゲルスの『家族・私有財産と国家の起源』内のもので、エンゲルスはさらにモーガンの『古代社会』を無批判に継承している。モーガンとエンゲルスの理論はその後、人類学者たちによって完全に否定されている。

テュルク・モンゴル系社会内の父系親族制度は13世紀に「崩壊」せずに、政治的再編成を繰り返しながらも現代までに機能してきた。父系親族制度に大きな衝撃を与え、一部では解体にまで追い込んだのは社会主義制度である。その最大の変遷を蒙ったのはハルハ・モンゴルである。ハルハ部と異なって、西モンゴルと漠南モンゴルの諸集団、テュルク系のウズベクとカザフ、それにテュルクメンなどは社会主義の洗礼を受けながらも、現在までに父系親族制度を維持してきた。ではなぜ、ハルハ社会では父系親族制度が機能しなくなり、他の地域・部族では維持されてきたのか。1990年から現在までに実施されてきたフィールドワークの成果を人類学・歴史学の研究と結びつけながら、ユーラシアにおけるテュルク・モンゴル社会における父系親族制度(それが「氏族」か否かも含めて)がどのように変遷したかを検討する。